

Title	施本「丙午年生れ子のさとし書」
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1962
Jtitle	史学 Vol.34, No.3/4 (1962. 3) ,p.165(419)- 166(420)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19620300-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

施本「丙午年生れ子のさとし書」

武田勝藏

丙午（ひのえうま）は宿曜曆によると火性で、この歳は火災が多く、出生の男女は氣性激しく、殊に女は男を食い殺すと云うので、丙午の女の縁談は忌みきらわれる俗信は近年までも所によつては傳えられていた。しかしこの俗信による不幸を慮り、これを排除するために、幕末、外來文化の波の寄きた文久二年八月に泉州堺の人某が、その信ずべからざる迷のために一文を草し、これを弘く施本し、これを手にした人は大きく寫して目立つ場所に張り付けるよう書き添えている。それで村々の心ある人は寫し取つたものと見えて、先日、湘南の地で發見したので紹介する。堺は既に「正平版論語」「醫書大全」等の施本もあり、かゝる奇特定の文化人がいたものと思われる。

丙午年生れ子のさとし書

何者のいひ出したりけん、丙午年に生るゝ子は、成人の後災ありと、これ大きなあやまり謬説なり、丙午にかぎりて人の運氣あしかるべきいわれ謂なし、かならず俗説に惑ふことなかれ、左はあれど、聞て氣にかける人もあらんか、婦人の類は別て苦勞にするもあるべければ、これを論じて曰、もろこし唐土千金方といふ醫書に、丙丁日夫婦交會を避べしとあり、我朝にては、昔より丙午に子種を蒔くことをいとむとぞ、こは丙も午も陽火さかの干支にして陰水を尅する事甚しきがゆへに、夫婦交合を慎よとのおしへなるべし、世に庚申の夜、又は甲子の夜を守ると同じ道理と見よ、然ればもと子のやどる時の沙汰にして、出生にはあづからぬ事とするべし、況や巳年にはらみたる子を午としにうむはいふまでもなき事なり、又看命一掌金といふ書に午としに生る人は佛道天福林福星に當りて、大吉なりといへり但し月日時刻によりて、凶なることもあるなり、かやうなる目出度子細もある事なれば、來丙午のたんじやうを殊こころよによるこびて、快く安産すべし、

來丙午中に丙午日六日あり、いつの年よりも、深く慎

みよかるべし、同く二月廿日、四月廿一日、閏五月廿三日、七月廿三日、九月廿四日、十一月廿五日これらの日に子がやどりさへせねば申分なしと心得べし、

天明丙午の頃も世上に専ら右の俗説をいひふらしたるによりて、時にのぞみし産婦は、大きにこれをうれへたり、中に愚なるものは、あらぬ事仕出て、一命にもかゝわることのありしときく、無難に生めるも生しやちがい丙午をかくさしむ、あゝなんのわけもなき事に、かくまで苦勞するは實に憐むべし、今、諸人の迷をはらし安心に子をあらしめんがために、此さとし書を施印となして、弘るものなり、これを得たる人は、さらに大きくなして、目立べからん所へはり付たもふべし、それを見る人、きく人せんくりに遠近人をさとしたまふべし、これ大なる善根功德なり、なを、くわしくは丙午をさとし文といへる一冊をあらはしおけり、求めて見るべし、これ又施本なるものなり、

弘化二己年八月十二日

泉州堺南中之町

施主何某謹誌

—N. Glueck, Rivers in the Desert,

a History of the Negeb, 1959

をめぐって

小川英雄

(一) 本書は紅海のアカバ灣と死海との間に横たわる荒地ネゲブ地方の古代史を聖書考古學 (biblical archaeology) の立場からまとめたものである。當地に對する歴史的關心は (a) エジプトとアジア諸地方との間の交流の結接點としての古代オリエント史上に於ける役割 (b) 肥沃な新月地帯の最南端に位置する沙漠周邊地域として、遊牧民の定着運動の波が觀察されること (その代表的な例が、ヘレニステック時代のナバテア人) (c) 舊約聖書の傳承のうち、ネゲブに關係のある事項 (アブラハム一族のカナン侵入、モーセへのヤーヴェ顯現、ソロモン帝國領等) の考古學的證明、の三點が考え